

旧香川県立体育館

香川県高松市

圧倒的な質感である。「全身コンクリート」。そんな表現がぴったりくる。マッシブなコンクリートは、吊り屋根の大空間を支える大柱や大梁、格子梁などとして重要な役割を果たしている。このテクスチャーはコンクリートならではのものだろう。長辺方向の両側に20mほど張り出したシンメトリの造形は和船を想起させ、地元では「船の体育館」として親しまれてきた。

設計は丹下健三で、完成したのは東京オリンピックが開催された1964年。この年は、この旧香川県立体育館が原型とされる国立代々木屋内総合競技場、東京カテドラル聖マリア大聖堂も完成している。当時の丹下は、国立代々木屋内総合競技場に相当の時間を費やしており、3つの大型建築の同時竣工は奇跡的とも言われた。コンピューターのない時代の大きな空間は、構造設計に専門家と二人三脚で途方もない手計算が繰り返された。構造計算書は数百ページにおよんでいる。更に、この流れるような三次曲面を鉄筋コンクリートで構築した先人の技術も特筆に値する。

エントランスは、格子梁が大きな軒下のような空間をつくっている。内部は、アリーナが観客席と段差なくつなげられ、選手と一体感をもって観戦できるのも他にはない特徴だ。内装は当時の代表的インテリアデザイナーの剣持勇、石庭は石彫家の和泉正敏が手掛けた。和泉は世界的な彫刻家、イサム・ノグチの日本での共同制作パートナーだった。香川県内でスポーツをする少年少女の憧れの舞台として歴史を刻んできた。県民にとっては屋内スポーツの殿堂であり、同じ丹下の設計である香川県庁舎（東館）とともにシンボルの一つに位置付けられてきた。



プレストレスコンクリート一部鉄筋コンクリート造、吊り屋根構造3階建て延べ4,707㎡、固定座席1,300席の規模をもつ。吊り屋根構造による美しい曲線を描く大空間が、国立代々木屋内総合競技場のプロトタイプと言われる所以である。内部は老朽化と耐震不足のため2014年から閉鎖されている。（内観写真は2011年3月撮影）

